**説教20230226　１ペトロ3：18-22マルコ1：9-13「荒れ野での苦しみ」**

**「あなた、見て来たように話しますね」という言葉は、その話の表現力の豊かさをほめているのか、或いは、その話の内に隠されている嘘を見透かして揶揄するかのどちらかでしょうが、ペトロの手紙に限っては、そのどちらでもありません。なぜならば、ペトロはイエス様に召し出されてからというもの、イエス様が召天する時迄、ほぼ、ずっと実際にイエス様と一緒にいたからです。すなわちペトロという人は自分の肌身で、イエス様を知っていた人だったのです。そしてペトロは、その手紙の中で、地上を歩かれたイエス様と直接は接していない私たちに対して次の様に語っています。**

**ペトロ手紙１　1章 8節**

**あなたがたは、キリストを見たことがないのに愛し、今見なくても信じており、言葉では言い尽くせないすばらしい喜びに満ちあふれています。**

**このペトロの発言は、キリストを見たことがない私たちに対して突き刺さってくることでしょう。なぜなら、ペトロ自身は肌身でキリストのことを知っており、そこにはいわば信仰するまでもない確信があるからです。このペトロ手紙の一字一句を、私たちは自分の内に刷り込むように丹念に読んで行けば、私たちもペトロのようなイエス様に対する確信が得られるのではないでしょうか。今回この手紙を読んで、私はそのように思いました。**

**ペトロの生涯を振り返ってみましょう。彼は、ガリラヤ湖の岸辺でイエス様から「人間をとる漁師にしよう」と言われ、それに応えてイエス様の弟子になりました。そしてその１２人の弟子たちの中で筆頭の弟子となり、イエス様が十字架に付けられる際には、「私はあなたを知らない」とイエス様のことを３度否んで、後悔して泣きました。それから、イエス様の葬られた墓にイエス様を探しに行き、遂に復活のイエス様と出会わされ、再びイエス様と食事を共にしたのでした。それから、イエス様が天に昇られる時に立ち会って、「主よ、イスラエルのために国を建て直してくださるのは、この時ですか」とイエス様に尋ねました。イエス様は言われました。「父が御自分の権威をもってお定めになった時や時期は、あなたがたの知るところではない。あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」こうイエス様が話し終わると、イエス様は彼らが見ているうちに天に上げられ、雲に覆われてペトロたちの目から見えなくなりました。**

**以上が、イエス様と実際に接したペトロの生涯ですが、この後もペトロは地上で４０年ほど生きて、キリストの福音を述べ伝えたのでした。そして、最後は、ローマ教会で初代教皇となり、さかさに十字架に付けられて殉教したと伝えられています。**

**このペトロとパウロとを比較すれば面白いのですが、この二人は同じ年に召天したと考えられています。そしてペトロは今述べたように終生、イエス様から離れず付き従ったのに対し、パウロは、イエス様の「サウロよなぜ私を迫害するのか」という声を聞いて回心するまでは、イエス様を殺そうとして付け狙う、迫害者だったのでした。**

**こんな風に経歴が全く違う二人の手紙が、聖書には並べておさめられているというのも、聖書のダイナミックさを物語っています。そしてペトロの手紙とパウロの手紙はその、語り口や受ける印象が全く違います。簡単に言えば、ペトロは肌身でイエス様に接した経験から語り、パウロは自分に現れて下さったイエス様の見えない霊によって自由に語っているという印象です。**

**そんな経歴も性格も全然違った二人の、実際のやり取りの一場面がガラテア書２章に記されています。すなわち、ペトロはユダヤ人たちがやって来たので、恐れのゆえに異邦人信者と一緒に食事をしなくなったので、そのことをパウロは福音にのっとっていない臆病な態度だと言ってペトロを非難したのでした。ここには優柔不断で調子のりのペトロと、完璧を期すパウロとの性格の違いが如実に現れています。**

**そんな違う二人が、キリストの福音を述べ伝えるために、共に豊かに用いられたということも実に幸いなことであります。**

**さて、このペトロの手紙には、実際にイエス様に接したからこそ描ける表現が随所に見られます。**

**1章 2節**

**あなたがたは、父である神があらかじめ立てられた御計画に基づいて、“霊”によって聖なる者とされ、イエス・キリストに従い、また、その血を注ぎかけていただくために選ばれたのです。**

**1章 18節から**

**知ってのとおり、あなたがたが先祖伝来のむなしい生活から贖われたのは、金や銀のような朽ち果てるものにはよらず、きずや汚れのない小羊のようなキリストの尊い血によるのです。**

**2章 2節から**

**生まれたばかりの乳飲み子のように、混じりけのない霊の乳を慕い求めなさい。これを飲んで成長し、救われるようになるためです。あなたがたは、主が恵み深い方だということを味わいました。**

**4章 13節**

**むしろ、キリストの苦しみにあずかればあずかるほど喜びなさい。それは、キリストの栄光が現れるときにも、喜びに満ちあふれるためです。**

**5章 2節**

**あなたがたにゆだねられている、神の羊の群れを牧しなさい。強制されてではなく、神に従って、自ら進んで世話をしなさい。卑しい利得のためにではなく献身的にしなさい。**

**これらのペトロの言葉を刷り込むように読んでいますと、そこには苦しみをものともしない、喜び、明るさがあります。今、ここで苦しんでいる時にもペトロはキリストにあって喜んでいられるのです。それは、彼がキリストに対して確信があるからです。キリストが血がしたたる十字架の上で苦しんで死なれたこと、そして復活して再び来られたこと、そしてやがて再び来られることをペトロはその体験からして確信しているので、彼はこんなにも喜んでいられるのです。**

**さて私たちも先週の灰の水曜日から受難節に入れられています。イエス様が荒れ野で４０日４０夜断食をして、苦しまれ、悪の誘惑を斥けられた受難のシーズンでありますが、私たちはイースター前には毎年、このシーズンを経験することになります。そしてイエス様の受難はすなわち私たち一人ひとりのこの世での実際的な受難でもあります。今の世の中で実際に荒れ野、と言う場面に身を置いて苦しみを受けることはまれでしょうが、今日の実際の「荒れ野」とは、この情けない世の中のことでしょうか、味気ない人間関係のことでしょうか、暴力と無慈悲がはびこる国際情勢のことでしょうか。具体的に数え上げればきりがないほど、今の苦しみはたくさんあります。**

**そして、このたくさんの具体的な苦しみから救われる鍵は、イエスキリストが受けた苦しみにあります。苦しむことによって苦しみから救われるということでありますが、それはどういうことでしょうか。今日のペトロの手紙の聖書箇所を見て参りましょう。**

**3章 18節**

**キリストも、罪のためにただ一度苦しまれました。正しい方が、正しくない者たちのために苦しまれたのです。あなたがたを神のもとへ導くためです。キリストは、肉では死に渡されましたが、霊では生きる者とされたのです。**

**キリストと言う全く正しい御方も、罪のためにただ一度苦しまれました。キリストはご自身は全く罪がなくて正しい御方でありますが、罪深い人間によって苦しめられたのでした。キリストもこのように苦しみました。ましてや罪がある私たち人間は、この地上の歩みにおいて、常に苦しみを伴う歩みをせざるを得ないでしょう。このことは実感として皆さんももう承知されていられることと思いますが、たとえ洗礼を受けたとしても、それによって私たちに苦しみが全くなくなるわけではありません。それどころか、前にもまして大きな新たな苦しみがやってくることもあります。**

**問題は、その苦しみをどうやって喜びへと変えていくかですが、ペトロの実体験でいえば、先ほども紹介しましたように、キリストを確信して、「むしろ、キリストの苦しみにあずかればあずかるほど喜びなさい。それは、キリストの栄光が現れるときにも、喜びに満ちあふれるためです。」**

**まあこの言葉に尽きていて、もう説明するのも余計なほどであります。私たちは測りがたく不思議なイエス様の力によって、自分の苦しみを喜びへと変えて頂くのです。**

**キリストは、ただ一度苦しまれました。このただ一度ということも私たちにとって大変重要であると思われます。キリストはただ一度だけ十字架に付けられ苦しんだのち、復活されました。この救いの出来事が、もし仮に何度も起こったらそれは以前の救いの出来事に対する確信を損ねることになります。２度あることは３度あるもので、そんなことでは決定的な出来事としてのキリストの救いは意味を成さなくなってしまうのです。**

**同様に、私たちも苦しみに対して、ただ一度だけ苦しむことが大切であります。それは苦しみが一回だけだという意味ではなくて、もちろん人生において私たちは多くの苦しみを味わうことになりますが、一つの出来事に対して苦しむのは一回だけにしよう、と言う意味であります。これは非常に現実的な身の処し方を含んでいまして、一つの出来事、或いは状況に対して、何度も何度も同じように悩み苦しんでいては、堂々巡りであり、一歩も前には進めないということであります。**

**とはいえ、私たちはそのような堂々巡りの苦しみに陥りがちでありましょう。なぜそんなことになってしまうかと言いますと、それは私たちがペトロのように復活のキリストをこの目で見た確信がなかなか持てないからでありましょう。私たちは信仰が弱まってしまいますと、今の苦しみに捕えらえて、今の苦しみに留まってしまって、堂々巡りの苦しみに入れられてしまいます。なぜなら、たとえ一歩踏み出しても、又、大きな苦しみが襲ってくると思ってしまって、前に踏み出さなくなってしまうからです。**

**しかし信仰深く歩む時は、私たちはその一歩を前へ踏み出すようにされます。なぜなら、たとえより大きな新たな苦しみが襲ってきたとしても、そのことで、かえって復活の喜びに近づいたのだと悟ることが出来るからです。**

**ペトロは言います。**

**3章 21節**

**この水で前もって表された洗礼は、今やイエス・キリストの復活によってあなたがたをも救うのです。洗礼は、肉の汚れを取り除くことではなくて、神に正しい良心を願い求めることです。**

**これもペトロらしい言い方ですが、様々な解釈が可能です。一つ言えることは、私たちは洗礼を受けて、自分の身を水によって清めて頂くことも大事ですが、それ以上に洗礼によって頂いた聖霊によって、常に前を向いて歩みを進め、神の前に正しい苦しみを受けつつ、それをその都度一回だけ味わいながら、更に永遠の祝福に至る道を前に歩んで行くということでありましょう。**

**パウロの物言いは、例えば、19節「そして、霊においてキリストは、捕らわれていた霊たちのところへ行って宣教されました」などで、現代において大変な論争を引き起こしています。そのことは「セカンドチャンス」として広く知られています。皆さんも一度「セカンドチャンス　聖書」というキーワードで検索してみて下さい。セカンドチャンスというのは簡単に言えば、キリストを信じないまま世を去った方にもキリストの救いが宣べ伝えられるのだという説でありますが、私たちはこの検索も、ただ一度だけにした方が得策でしょう。なぜならば、私たちが、イエスキリストから宣教を託されているのは、ただこの地上生涯においてのみだからです。私たちはこの地上に生かされている限り、精いっぱいキリストを述べ伝え、そうして世を去った後のことは、キリストの愛とまことに満ちた御計らいに全てお任せをして参りましょう。**

**祈ります**

**父なる神よ、あなたはこの世を歩む苦しみの次に必ず、大いなる喜びがあることをペトロに証しされました。どうか私たちも、御子イエスによりたのんで、救いの道を喜んで歩んで行くことが出来ますように。**

**一つの苦しみに執着し、堂々巡りをしてしまう私たちを励まし勇気づけ、前に向かって新たな一歩を踏み出すことが出来るようにして下さい。**

**トルコシリアで起った大地震を覚えます。亡くなられた方、御家族の上の悲しみ、苦しみをあなたが癒し慰めて下さい。**

**全ての喜びの源である御子イエス様のことを告げ知らせる宣教の業を、この地上にある限り、たゆむことなく、私たちに行わさせて下さい。**

**父と聖霊と共に**